

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00571

研究課題名(和文) 印欧語史的形態論研究の最前線：動詞語幹形成母音の起源

研究課題名(英文) The forefront of the historical morphology of Indo-European: the origin of the thematic vowel in verbs

研究代表者

吉田 和彦 (Yoshida, Kazuhiko)

京都産業大学・外国語学部・教授

研究者番号：90183699

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：アナトリア諸語において語幹形成母音*-e/o-を持つ動詞は記録されていない。しかし現在形語幹を形成する接尾辞*-ye/o-を持つ動詞は数多くみられる。アナトリア祖語は接尾辞の母音が一貫して*-e-である(*-ye-)という印欧祖語の特徴を保持している。アナトリア語派が印欧祖語から離脱した後、なお一体性を保っていた他の語派において、アクセントの後の閉音節の*-e-が*-o-になるという音変化が生じた。その結果、*'-ye-~*'-yo-という交替がもたらされ、そこに含まれる*-e-~*-o-は、語尾の一部として再解釈された結果、接尾辞を持たない動詞にも広がった。これが語幹形成母音の起源である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

印欧語比較言語学の発展の鍵を担うアナトリア諸語を研究の中心にすえて、印欧語史的動詞形態論に関する実証的な分析を進めた。その結果、印欧語動詞にみられる語幹形成母音の起源という未解決の問題に対して妥当な歴史的説明を与えることができた。

また、印欧語族に属する語派の下位分類の問題にも新たな光をあてた。アナトリア語派には他の印欧諸語と異なる特徴が顕著にみられる。それらの特徴のなかには、他の印欧諸語にまったく欠けているものがある。そして、これらの特徴の多くは祖語に遡るものと考えられ、アナトリア語派では保存されたが、アナトリア語派が祖語から離脱した後、他の多くの言語では一般に失われた特徴として理解できる。

研究成果の概要(英文)：The Anatolian languages have virtually no attestation of simple thematic verbs in *-e/o-, but thematic verbs with the suffix *-ye/o- are abundantly attested. This suffix was used to form the present stem. There is no compelling evidence for reconstructing the thematic vowel *-o- in the active paradigm for Proto-Anatolian. The persistent e-vocalism is a feature inherited from Proto-Indo-European. The thematic conjugation originated from the root accented *-ye/o-present. After Anatolian split off, the extra-Anatolian branches remaining as a unity underwent the phonological rule that changed *e to *o in post-tonic closed syllables, so that the alternation of *'-ye- and *'-yo- was introduced into the verbal paradigm. The vowels *e and *o of the suffix immediately preceding the endings came to be reinterpreted as a part of the endings, and the new endings with *-e/o- later spread to the simple thematic active verbs. The origin of the thematic vowel *-e/o- is thus explained.

研究分野：印欧語比較言語学

キーワード：アナトリア諸語 印欧祖語 語幹形成母音 印欧語比較言語学 印欧語族 動詞形態論 言語の下位分類

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

印欧祖語の動詞には、母音交替を示すタイプと母音交替を示さないタイプの2つがあった。前者の例として *h₁és-ti '(s)he is' ~ *h₁s-énti 'they are' がある。これに対して、後者は、たとえば、*bhér-e-ti '(s)he bears' ~ *bhér-o-nti 'they bear' にみられるように、語幹がつねに一定で、語尾直前に *-e- または *-o- という語幹形成母音を持ち、アクセントの移動がなく、母音交替を示さない。これらのうち前者のタイプがより古く、分派諸言語においては次第に後者のタイプが生産的に用いられるようになった。また、動詞パラダイムのなかでの語幹形成母音の分布については、ラテン語やギリシア語の根拠から、1人称単数、1人称複数、3人称複数に *-o- を、2人称単数、3人称単数、2人称複数に *-e- を祖語の段階で持っていたと一般に考えられていた。

語幹形成母音 *-e/o- の起源についての重要な研究として、Calvert Watkins. 1969. *Indogermanische Grammatik III/1: Geschichte der indogermanischen Verbalflexion*. Heidelberg. と Jay Jasanoff. 1998. "The Thematic Conjugation Revisited." *Mir Curad: Studies in Honor of Calvert Watkins*. Innsbruck. があげられるが、いずれも思弁的な考察が多く、文献学的な裏づけが不十分である点が大きな課題となっている。

2. 研究の目的

同系統に属する諸言語を比較することによって祖語を再建し、祖語の段階から各分派諸言語がどのような歴史を経て成立したのかを明らかにすることは、比較言語学の最も重要な課題である。言語の歴史的研究の分野において、研究の進展に大きな影響を与える要因のひとつは従来知られていなかった新資料の追加であり、もうひとつは新しい方法論の導入である。アナトリア語派の諸言語に関する文献学的研究のめざましい発展は、近年の印欧語比較研究に対して、量と質の両面から以前とは根本的に異なる視点を与えている。本研究の目的は、アナトリア諸語に保存されている古い言語特徴に基づいて、印欧語動詞にみられる語幹形成母音の起源という未解決の問題に対して妥当な歴史的説明を与えることにあった。

3. 研究の方法

ヒッタイト語ならびにその周辺の古代アナトリア諸言語に関する文献学的研究は、近年めざましい発展を遂げている。量の面については、発掘されたヒッタイト語粘土板の数はこの30年のうちにほぼ倍になり、総数は現在約3万枚にのぼっている。また、象形文字ルウィ語、リュキア語、リュディア語などの古代アナトリアで使われていた他の印欧諸語についても、近年新資料が つぎつぎに発掘され、それにともない、個々の言語の解読作業やデータの言語学的解釈が着実に進展している。その結果、本格的なアナトリア比較研究が可能な段階に到達した。また質の面では、近年の文献学的研究の進展によって、粘土板に記録されたヒッタイト語が古期ヒッタイト語（紀元前1570—1450年）、中期ヒッタイト語（紀元前1450—1380年）、後期ヒッタイト語（紀元前1380—1220年）に時期区分されるようになった。これによって、体系的なヒッタイト歴史文法の構築が可能となった。

本研究においては、うに示したようにめざましい進展を遂げているアナトリア諸語を比較研究の中心に据え、実証的な文献学的考察と収集・整理された資料に対して厳密な歴史比較言語学的方法を適用した。

4. 研究成果

印欧語動詞にみられる語幹形成母音の起源という未解決の問題に対して妥当な歴史的説明を与えるために、アナトリア諸語に保存されている古い言語特徴に基づいて、実証的な比較言語学的分析を進めた。

アナトリア諸語においては、語幹形成母音*-e/o-を持つ動詞（thematic verbs）は実質的に記録されていない。しかしながら、一般に*-e/o-で終わると考えられている印欧祖語の接尾辞*-je/o-および*-ske/o-を持つ動詞は数多くみられる。このふたつの接尾辞は動詞現在形語幹を形成するために用いられていた。アナトリア祖語の時期において能動態の動詞パラダイムに語幹形成母音*-o-が再建されることを示す根拠はない。この知見は、アナトリア諸語の事実を十分に考慮せずに再構成された、伝統的な語幹形成母音の再建と根本的に異なっている。そして接尾辞の母音が一貫して*-e-である（*-je-および*-ske-）のは印欧祖語に遡る特徴であることが実証される。アナトリア語派以外の言語においてみられる、パラダイム内部で交替する語幹形成母音*-e-~*-o-の起源は、語根にアクセントのある接尾辞*-je/o-を持つ現在形にあると考えられる。アナトリア語派が印欧祖語から離脱した後、なお一体性を保っていた他のすべての語派において、アクセントの後の閉音節にある*-e-は*-o-になるという音変化が生じた。その結果、動詞パラダイム内部に*-je-~*-jo-という交替がもたらされた。さらに語尾直前にある*-e-~*-o-は、現在形動詞語尾を独自に特徴づけるために、語尾の一部として再解釈された結果、この*-e-~*-o-は後に接尾辞を持たない動詞にも広がった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Kazuhiko Yoshida	4. 巻 2
2. 論文標題 Inferring Linguistic Change from a Permanently Closed Historical Corpus	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Handbook of Historical Linguistics	6. 最初と最後の頁 196 - 213
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kazuhiko Yoshida	4. 巻 1
2. 論文標題 Some Old Morphological Features of Hittite Imperatives	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 And I Knew Twelve Languages: A Tribute to Massimo Poetto on the Occasion of His 70th Birthday	6. 最初と最後の頁 735-743
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田和彦	4. 巻 93
2. 論文標題 ヒッタイト語における不規則な3人称複数過去語尾-ar	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西南アジア研究	6. 最初と最後の頁 44-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田和彦	4. 巻 64-2
2. 論文標題 ヒッタイト語の小辞-wa(r)の歴史言語学的考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 オリエント	6. 最初と最後の頁 133-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kazuhiko Yoshida	4. 巻 1
2. 論文標題 The Hittite 3 pl. Preterites in -ar Revisited	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Lyuke wmer ra. Indo-European Studies in Honor of Georges-Jean Pinault	6. 最初と最後の頁 538-545
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kazuhiko Yoshida	4. 巻 1
2. 論文標題 Some Diachronic Remarks on the Hittite enclitic particle -wa(r)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Ha! Linguistic Studies in Honor of Mark R. Hale	6. 最初と最後の頁 413-422
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 吉田和彦
2. 発表標題 比較言語学の陥穽
3. 学会等名 ことばの科学研究所令和2年度第2回研究会
4. 発表年 2020年～2021年

1. 発表者名 Kazuhiko Yoshida
2. 発表標題 The Hittite 3 pl. Preterites in -ar
3. 学会等名 The 38th East Coast Indo-European Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 Kazuhiko Yoshida
2. 発表標題 Some Diachronic Remarks on the Hittite enclitic particle -war
3. 学会等名 The 40th East Coast Indo-European Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 吉田和彦
2. 発表標題 印欧祖語に再建される基本語順およびゲルマン語に生じた語順変化
3. 学会等名 ことばの科学研究センター令和3年度第7回研究会
4. 発表年 2021年～2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関